同朋大學佛教文化研究所報

第34号

発行日　令和三年三月三十一日
編集・発行　同朋大学佛教文化研究所
代表者　安藤　弥
〒四五三-八五四〇
名古屋市中村区稲葉地町七の一
TEL〈〇五二〉四一一-一三七三
FAX〈〇五二〉四一一-一三六九
e-mail : bc-inst@doho.ac.jp
（題字は池田勇諦元学長）

仏教文化研究所と私

文学部人文学科特任教授　服部　仁

私が研究所の所員になったのは、昭和五十年代の半ばのことでした。残念ながら、正確な記憶はありません。研究所創設時からの所員であった沼波政保先生の後任として、国文学科から派遣されたのでした。

昭和五十二年（一九七七）の創設時は同朋学園仏教文化研究所、すなわち研究所は学園の一機関でありましたが、私が所員になった記憶が曖昧なくらい、当時の研究所は学園内で存在感が希薄でした。その理由は、二つあります。一つは設立事情ですが、これについては触れません。二つ目は、創設時のメンバーであった所長藤井智海先生、幹事の畝部俊英先生、所員の織田顕信先生、戸田信正先生、近藤祐昭先生、沼波先生、名古屋音楽大学の西崎専一先生、名古屋造形芸術短期大学の中村英樹先生の間で、ある申し合わせができておりましたが、それが一年経つか経たないかのうちに反故にされてしまったからでした。「あの申し合わせは何だったのか…」ということになり、微妙な雰囲気が漂いました。

しかし、このことは逆に、研究所にとってプラスに働きました。研究所の所員、研究員が自由に活動でき、調査研究を大いに進める結果につながったのです。所員は各学科からの選出（音大、造形は一名ずつ）で、研究所に対してまったく関心のない先生が選ばれることもありましたが、そういう方は所員になっても研究所に近よらず、ただし干渉もなさいませんでした。たとえば、ある先生は私に「一年間、一度も研究所には行きませんでしたワ」と言われました。それで逆に、自由な調査研究に没頭、邁進することができ、研究成果や貴重史料を蓄積することができたのでした。

私自身もあちこちの調査に随行し、調査活動に関与しました。小島恵昭先生らが「絹本着色」とか「紙本墨書」などと言われるのを調査カードに記録するのが、私の仕事でした。採寸・撮影から、ご住職との対話など、自然と役割分担があったように思います。甲府へ行った時は、お寺でブドウをご馳走になりました。織田先生の食欲にはいつも驚愕しました。

また、三日間で滋賀県から大阪府・和歌山県へと調査した記憶もあります。滋賀県の調査先は周囲に堀をめぐらせた大きなお寺で、国重要文化財の本堂もさることながら、途中まで完成している、着色しかけの五巻本の絵巻が印象に残っています。非常に多くの蔵書がありましたが、代々の蓄積ではなく、ある代の愛書家、数代後の教学者が集めるという具合であることが実感できました。織田先生によれば、「大体どこでもこんなふうだヨ」とのことでした。

そういえば、所員になる前、研究所の助手にいた渡邊信和さんからの情報で、評判記『たきつけ草』の写本が三河のあるお寺にあることを知りました。幸いにそのお寺の坊守さんが本学国文学科の卒業生で、とても親切にしてくださり、現物を貸していただきました。その本は、延宝五年（一六七七）刊本より早い写本であることがわかり、おそらくは矢作川の洪水に対応するため寺院の移転許可や相談に上洛した当時の住職が筆写したのではないかと考えました。

妙なことを記したように思われるかもしれませんが、どの先生方も、もっと学内の研究機関である研究所を活用し、発展させるべきだということを申し上げたいわけです。研究所の輝かしい未来を念じて擱筆いたします。

そして、『同朋大学論叢』第四二号で史料紹介をしました。

〔史料紹介〕

新出の松浦武四郎書簡（足代弘訓宛）写について

千枝　大志

北海道の名付け親で知られる勢州一志郡須川村（現三重県松阪市小野江町）出身の探検家・松浦武四郎は、例えば『東本願寺北海道開拓錦絵』の詞書から読みとれるように、東本願寺現如の北海道巡教といった近代初期の真宗の動向にも実は関係する人物だが、真宗史研究の分野ではほぼ無名の存在であり、故に松浦の事績は余り知られていない。

本稿は、本年度後期の史料展示『東本願寺現如と北海道―「本願寺道路」着工一五〇年―』に出品した「勢州渡会郡田曽浦へ安政二年ノ正月朔日漂着同四日礫浦へ先綱以て引入候其節松坂槙戸一郎筆談之写」と表紙のある、志州鳥羽藤之郷（現三重県鳥羽市）の大庄屋廣野藤右衛門家伝来の竪帳形態（縦三四・三糎×横一六・四糎）の書簡留一冊（鳥羽市教育委員会生涯学習課所蔵廣野藤右衛門家文書　受入№二七六一「清国難民漂着覚」）に含まれる松浦武四郎の新史料を翻刻し、その事績の一端に触れることで彼の存在を喚起的に紹介することを意図した小考である。

まず、宛先の足代権大夫と寛居大人は、勢州度会郡山田宮後西川原町（現三重県伊勢市宮後町）居住の伊勢御師であり大塩平八郎等と広く交流したことで知られる伊勢を代表する国学者（荒木田久老・本居春庭・同大平の門人）足代弘訓（一七八四～一八五六）のことを指す。足代は松浦の師であり、勢州津（現三重県津市）の木綿問屋川喜田石水とも昵懇の間柄のように（『幕末維新を生きた旅の巨人　松浦武四郎』凸版印刷株式会社　二〇一八年）、当該期勢州での知識人ネットワーク上の重要人物である（拙稿「国学と伊勢」『伊勢市史　第三巻　近世編』伊勢市　二〇一三年）。本書簡写（以降、Ⓐと略記）は三通からなり、一通目（以降、①と略記）は「西蝦夷地セタナイ」（現北海道久遠郡せたな町）、二通目（②と略記）は「ソウヤ場所」（現北海道宗谷郡宗谷漁港）、三通目（③と略記）は「カラフト　チカヘロシナイ」（樺太帆寄村近幌　現ロシア連邦領）からの発信である。Ⓐには、松浦が初めて幕府の御雇役人として蝦夷地入りをはたした四回目の踏査、すなわち安政三年（一八五六）時の蝦夷地探検の内容が記される。彼は蝦夷地の幕府直轄地化により、松前藩からの蝦夷地や樺太の「請取渡」のために「廻浦」する箱館奉行支配調役の向山源太夫（Ⓐでは「白山」と誤写。向山は同年八月に宗谷で病死）の「手附」として三月から十月に海岸線を中心に一周しており、Ⓐには三月二十九日から六月十四日までの蝦夷地廻浦の動向がみえる。また、③とほぼ同内容の松浦の自筆書簡が、松浦武四郎記念館に所蔵されるが（『三雲町史　第三巻　資料編二』三雲町　二〇〇〇年）、それは勢州津の藤堂藩士野田竹渓宛である。そのため、『松浦武四郎研究序説』（北海道出版企画センター　二〇一一年）所収「松浦武四郎関係書簡一覧」では、Ⓐの内容と酷似する石水博物館所蔵の宛先不明の松浦書簡写（Ⓑと略記）は野田竹渓宛と推定されるが、Ⓐの出現によりその点は訂正できる。というのも、ⒶとⒷを見比べたところ、本文はもとより地の文も文言が酷似するが、Ⓑは Ⓐの内容をまるで清書したような形跡が散見できるからである。その一例を示せば、Ⓐの②の末尾にある、いわば彼手製の蝦夷地略図は、②の本文理解の補助のため箱館から宗谷までの海岸沿いのルートが記されるが、Ⓑでは③の末に付されている。もし、この蝦夷地略図が③の本文と対応した略図ならば、樺太までが記されないと不自然であるため、Ⓑでの略図の位置づけは書簡三通の付図の扱いに変更されたと推測できる。つまり、Ⓑは Ⓐの内容を整理した写本である。

ところで、廣野家になぜⒶが伝わったかについては、現時点では次の三点から説明ができるのではないかと考えている。すなわち、

㈠　七代目廣野藤右衛門の一族に足代弘訓の門人がいる点。

㈡　廣野藤右衛門は経世家として鳥羽の窮状を憂い、伊勢湾やその周

辺海域の海防等の異国人問題に強い関心があったと思われる点。

㈢ 松浦の自伝（『新版 松浦武四郎自伝』北海道出版企画センター二〇一三年）の嘉永六年（一八五三）十月四日条では、「鳥羽の方より薬屋破魔助と申もの」が松浦に鳥羽の窮状を詳細に訴えている。実は、鳥羽居住の薬屋の破魔助なる人物は廣野氏に比定できる可能性が高い点（廣野藤右衛門家の家業が薬種商（薬問屋）であることや、廣野邸の眼の前が当時は海、すなわち海浜であることから、彼の通称として「破魔」（浜）は相応しいこと）。

以上より、足代宛の松浦書簡の原本は廣野家（筆耕者がいたかは不明ながらも）側で書写された可能性が想定され、それが故にⒶが廣野家旧蔵史料として現存したと判断できる。恐らく、足代はこれら三通を十月中に入手し、その後直ぐに書写したと推測できるが、その経緯等により、いわば三重県中南勢・鳥羽（津・山田・鳥羽）といった所謂《伊勢文化圏》（『石水博物館所蔵 小津桂窓書簡集』和泉書院 二〇二一年）の知識人層に蝦夷地の最新情報が共有されたことは驚くべき事象といえよう。

以上、新出の松浦武四郎書簡（写）を紹介してきたが、紙幅の都合上、本稿の考察自体は新史料の書誌的な概要の提示に終始した感がある。

よって、彼の事績を含めた詳論、特に真宗との問題は後考を期したい。

【翻刻文】※翻刻に際し適宜、漢字を通行体に改め誤字等を修正した。また、余白部分は詰め、朱字による注記は斜体、朱線は黒線で表現した。

①【安政三年四月十七日付足代弘訓宛松浦武四郎書簡写】

辰四月十七日西蝦夷地セタナイ出十月朔日

松浦氏書状

越前敦賀ニ出し候ニ上封何と仕候間宜敷候哉御しらせ奉願候

三月廿九日箱館表ゟ同所弁天町能登屋庄蔵と申者工夫ニ而作り候踏車船ニ而出立仕候同日昼前当別村着和泉沢村宿

松前ヨリ十三リ十六丁

四月朔日夕知内村へ参り候処沖合三本檣弐艘蒸気船一艘参り当村川口四五丁ニ懸り申候此船英船ニ而箱館ゟ出帆

二日私共出立之頃右三艘共出帆仕候同氷雪の上七里

松前ヨリ七リ

知内村ゟ福島村へ着仕候

知内ヨリ六リ十七丁

三日松前城凡壱里斗之処ニ参り候處市中請負人問屋町年寄共凡三拾餘人ニ而麻上下出迎続而町奉行医師家老并徒目附等者■丁目〳〵ニ出迎町中厳■敷辻ニ相固メ此度人数凡百人余ニ而参り候と思居候処白(向)山上下五人大田上下三人私上下三人位之事右省略之事市中も瞻を冷し候事ニ御座候旅宿者佐々木内膳と申社人の宅亭主萬や仙左衛門山田や文右衛門両人ニ請負人取扱役家士三人常詰門番迄相立私共者伊藤仙右衛門と申処へ割宿門番迄附られ実ニ右ニ順し候馳走美を尽し候事草紙ニ不尽候

四日滞留少々境目之懸合等有之候

松前トチイサコトノ間此間九リ

五日出立江差町村出候處是又城下出放れ迄請負人問屋町年寄奉行等送り

六日朝ゟ出立沖合異国船壱艘相見へ申候汐口村泊り

チイサコト江刺ノ間九リ

此日は石崎村通行仕候処川々(ニ)は十八艘の船を以て橋を架徒目附壱人足軽二人出張

チイサコト江刺ノ間

七日上之国村川等二十二艘の船にて船橋懸ケ徒目附足軽出張小休昼前たりとも皆徒目附足軽出張

松前ゟ十七リ十四丁

仕候江差入口ニ者江さし町奉行目附一人問屋町年寄出迎申候旅宿門番屋笠立見事之事ニ御座候

松前ゟ十七リ十四丁

八日少々境目之事ニ而江差ゟ篠山と申岳ニ朝ゟ登り雪路凡一り斗消かゝり之処大難渋仕候夫ゟ山こし道なき処厚沢辺と申候川筋へ下り夜ニ入て

乙部村と申へ着仕候止宿
九日此処にて桧山并ヲクシリ島八ヶ村之書附取渡しニ相成候
松前ゟ廿七リ五丁
十日出立熊石村八ヶ村之者引渡し被　仰渡し有之候
十一日番所不残請取私者是ゟ平田内山と申へ小稼之壱人召連上り申候夜ニ入帰り
熊石トフトロノ間此間二リ十六丁
十二日白山殿(向)船ニ而出帆クトウ場所へ渡り私共是ゟ山越新道国方見積りニ参り申候
十三日今日クトウ夷人共へ被　仰渡有之候処
フトロ　熊石ノ間
私共出立夷人一人召連大田山山越綱ニ而岩の上へ
松前ヨリ廿七リ卅五丁
引上られ候間所々こえ夜ニ入フトロ場所着
十四日フトロ川筋夷人召連見分仕候　白山殿(向)今日クトウゟフトロへ着ニ相成候
松前ゟ卅九リ卅五丁
十五日私共一人フトロ夷人一人セタナイ夷人壱人召連候間トウシヘツと申川を船ニ而上り山中バンケモセウシナイと申処の川原にて野宿夜ニ入猪多く臥處ニ参り申候
十六日朝又二里斗月影にて棹さし上り夕方下り
松前ゟ卅九リ卅五丁
申候セタナイ江宿ス　今日白山殿(向)フトロ未た滞留之由申来り候
尚此跡私共此方跋渉之次第申上候先者早々謹言
松前ゟ卅九リ卅五丁
辰四月十七日暁　西蝦夷地セタナイニ而
松浦竹四郎
寛居大人

栖林桧垣君ニよろしく奉願上候実ニ此度所々ニ而公儀衆と申敬せられ候身の行衛人の世の中も大按じられ申候

②【安政三年五月二十日付足代弘訓宛松浦武四郎書簡写】

五月廿日ソウヤ出十月朔日着
西蝦夷地海岸先達申つる処より石カリ迄之処是迄人間通行無之分
松前ゟ五十五リ五丁　磯屋ヨリ五リ廿五丁
磯屋ゟ岩内迄　ライテン越
松前ゟ六十リ十丁　岩内ゟ四リ廿三丁
岩内ゟフルウ　カフト越
松前ゟ六十五リ十七丁　フルウゟ九リ卅五丁
フルウゟシヤコタン　ヲヤムイ越
松前ゟ七十五リ十六丁　シヤコタンゟ五リ十六丁
シヤコタンゟヒクニ　山越
松前ゟハ十二リ十七丁　フルヒラゟ四リ廿四丁
フルヒラゟヨイチ　ユイナイ越
ヒタニゟ一リ廿一丁
等不残夷人三四人づゝを引纏山道或ハ大熊笹原中等分ケ其餘何れも船ニ少しも不乗五月六日石ガリへ着仕候
七日　滞留
松前ゟ百九リ廿九丁　松前ゟ百十七リ十一丁
八日白山源大夫(向)ゟアツタゟ浜マシケ江船にて出立ニ相成申候拙子是ゟ丸木船ニ而夷人八人を引連候其夜ツイシカリ泊り
九日
十日
十一日名もなき石カリ大川筋川原ニ而野宿致し上り
十二日大川とウリウと申川筋之分れゟ一り斗上り野宿
十三日ゟ亥子をさし八人之夷人を引連谷地或ハ大熊笹原を越少々行て熊鹿の道をもとめてハ上り〳〵至るルチシ山と云に至り野宿

十四日此山元堅氷の上を九ツ過まて上り是ゟ大熊笹原を分て北海さして下り申候又フシヤイトコと申辺にて野宿

松前ゟ百卅二リ十六丁

十五日此川中大石転太流の中をわたり其夜ル、モツへと申処へ出申候漸々人間ニ逢候左候処其浜の者不見馴山夷人斗を引連来り候事故大ニ仰天仕候由ニ御座候夫ゟ海岸の上の笹原へ火打附相図仕候運上屋へしらせ申候処早々白(向)山源大夫殿申置ニ付大勢迎等出実ニ目を驚かせ候少々欺売者流(モトノマヽ)めき候事を仕候止宿

十二日ゟ今日迄は飯者樺にて鍋を作り是にて炊き喰塩気は一日梅干三粒ニ不過様仕候実ニ随分後来話の種を作り申候

十六日出立　チユフナイ泊り　此日　十五り八丁

松前より百五十九リ半

十七日出立　テンヲ(ヲ)泊り　此日　十二里

松前ゟ百七十二リ十六丁

十八日出立　ハツカイ泊り　此日　十三里

松前ゟ百八十一リ十六丁

十九日出立　ソウヤ着　此日　九里

にて白(向)山殿ニ対面仕候実ニ豪熊ニ野宿中逢事数十度鷲鹿の多きことは数へかたし然し夷人毒箱を帯し案内致し候事ニ御座候少しも右ニ恐るゝ事無之候只急流と大熊笹の一丈五六尺立の中ニぶとう蔓のからミ居候ニは困り申候然し山道中梅雨之事ニ候得共一雨もなく人間世界ニ出候事は実ニ天我に幸を授給ふやらんと奉存候尚今廿日松前家ゟ当所請取佐竹家へ台場等渡し明日ゟ日和次第カラフト渡りニ相成申候間乍乱筆一封差上置候尚後便申上候桧垣楢林其餘御社中へ宜敷御伝言之程奉希候以上

松前ゟ百八十一リ十六丁

五月廿日朝　　ソウヤ場所ニ而

松浦竹四郎

足代権大夫様

玉案下

（箱館から宗谷までの海岸沿いの蝦夷地略図一枚　※本稿末の写真を参照）

③【安政三年六月十四日付足代弘訓宛松浦武四郎書簡写】

辰六月十四日出松浦子重西蝦夷地カラフト」チカヘロンナイゟ書状同十月十七日着

尚桧垣楢林君へもよろしく奉願候心緒紛々御高覧〳〵

五月廿二日ソウヤ出帆仕候廿三日八ツ半過カラフト」シラヌシへ着仕候

廿四日滞留仕候

廿五日私共壱人アイノ壱人召連陸通り又ヒシヤサンと申大難所越廿七日フウルへ出候此處ゟ船にてクシユンコタン江

廿八日昼頃渡り申候滞留仕候

六月五日白(向)山源大夫殿一同クシユンコタンニ着ニ相成候六日松前家ゟ惣而請取渡相済申候

七日私共一人又アイノ三人を召連シユ〳〵ヤ越と申を仕候四日野宿道法三拾八里之処只一ヶ所タコイと申処ニアイノ小屋有之候を山越仕候東海岸ナイフツと申へ出申候處

十一日夜分ヲロツコ人拾人斗小船二艘ニ乗申候て参り話し候にタライカのシントコと申処江異国船二艘来り候由海馬水豹を捕滞船仕候由申候ニ付さま〳〵聞合候得共通辞なき不通之者へ不通之蝦夷人を以て聞かせ候事故一向不弁之処追々聞取候ニ適意仕候事も有之候間九里行

十二日ノタサン泊り九里泊半行

十三日シラロへ泊りニ而快(決カ)心此度之御所望長く禄を喰候而後来志士の笑草となるよりも国の為今世人の笑草となるべしと官よりもし咎ニ逢ふとも国の為世の為古より例なきにもあらすと快(決カ)心是よりアイノ廿三人を透引仕候ヲロツコ江抜駈仕候一探索仕候へしと存候今朝マノヌイ場所ヲハコタンの鹿嶋の社　此社去々年堀君四島之節初而建立　に詣ル

行先の程ハわれしも白浪のたちへたつるをかきりともかな

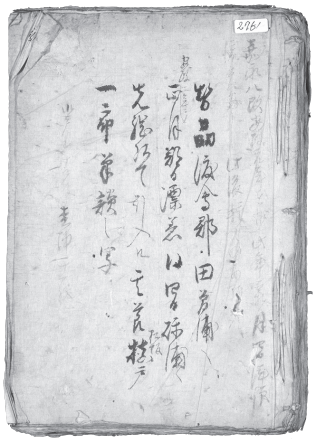
と奉幣して丸木船にてトツソと申岬へ今日懸り候処如何ニも浪荒ニ付当処へいたり申候風待仕居候間一封認置尚帰嶋之上委細申上候謹言

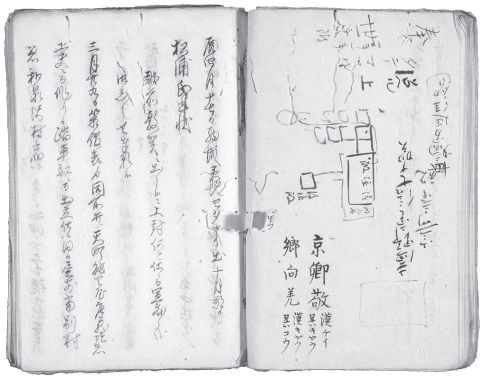
水無月十四日　　カラフト　チカヘロンナイニ而　弘

足代権太夫様

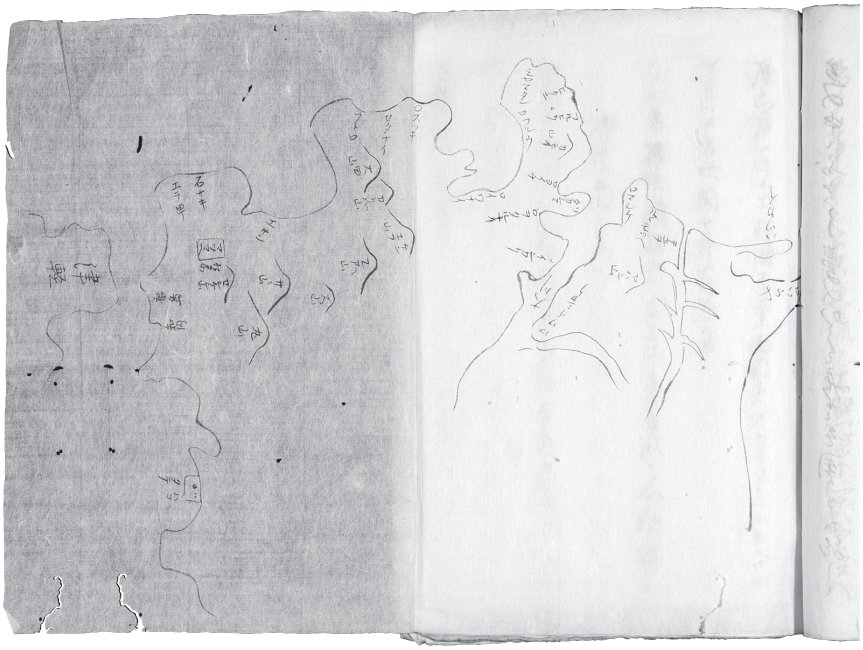
玉案下

【史料写真】※表紙部分及び、書簡①の冒頭部と書簡②の付図の部分





②の末尾にある箱館から宗谷までの海岸沿いの蝦夷地略図（付図）
【写真左端下にある「ハコタテ」（箱館）から右端中央の「ソウヤ」（宗谷）までの間の海岸部に地名や山河名等が散見できる】



【付記】本稿執筆にあたり、特に次の機関や個人のご協力を賜りました。末筆ながら記して謝意を表します（敬称略）。
鳥羽市教育委員会生涯学習課・石水博物館・鳥羽大庄屋かどや・松浦武四郎記念館・橋本雄・桐田貴史・山本命・野村史隆・豊田祥三・龍泉寺由佳・世古詩織・廣野克子

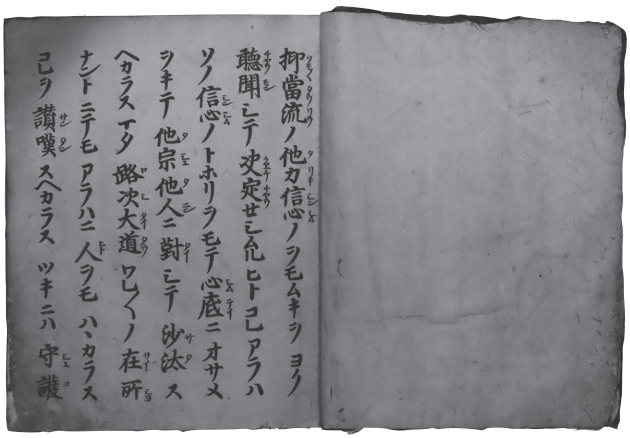
〔研究所新収史料について〕

◎顕如判御文　一冊（粘葉装）

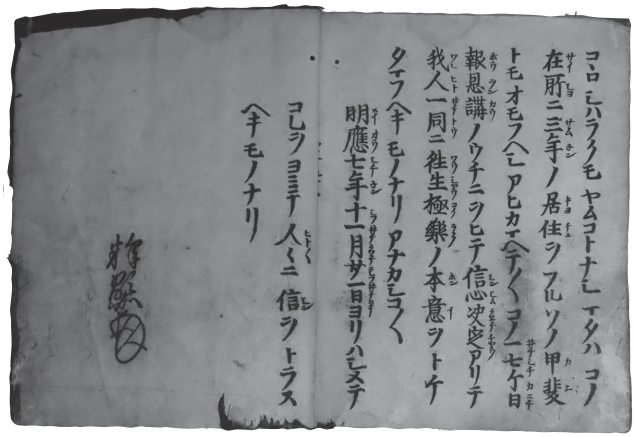
縦二七・〇cm×横二二・一cm　墨付五一丁

末尾に「釈顕如（花押）」とあり、本願寺十一世顕如（一五四三―九二）が証判する御文（蓮如が著した消息形式の仮名法語）で、次の二八通を収める取り混ぜ本である（数字の「〇―〇」は五帖御文の〇帖目〇通を示す）。①②㉕～㉘はそれぞれ独立丁で（③～㉔は五帖目完全体）、まさに綴じ合わせであることがわかる（のどには帖・丁の情報を示す墨付が見える）。

①抑当流ノ他力信心ノヲモムキヲ（二―六）
②抑毎月両度ノ寄合ノ由来ハ（四―十二）
③末代无智ノ（五―一）
④ソレ八万ノ法藏（五―二）
⑤夫在家ノ尼入道タラン身ハ（五―三）
⑥抑男子モ女人モ罪ノフカヽランモカラハ（五―四）
⑦信心獲得ストイフハ（五―五）
⑧一念ニ弥陀ヲタノミタテマツル行者ニハ（五―六）
⑨夫女人ノ身ハ五障三従トテ（五―七）
⑩ソレ五劫思惟ノ本願トイフモ（五―八）
⑪当流ノ安心ノ一義トイフハ（五―九）
⑫聖人一流ノ御勧化ノヲモムキハ（五―十）
⑬抑コノ御正忌ノウチニ（五―十一）
⑭当流ノ安心ノヲモムキヲ（五―十二）
⑮ソレ南無阿弥陀仏トマウス文字ハ（五―十三）
⑯ソレ一切ノ女人ノ身ハヒトシレス（五―十四）
⑰夫弥陀如来ノ本願トマウスハ（五―十五）
⑱夫人間ノ浮生ナル相ヲツラ〳〵観スルニ（五―十六）
⑲ソレ一切ノ女人ノ身ハ後生ヲ大事ニ（五―十七）
⑳当流聖人ノスヽメマシマス安心トイフハ（五―十八）
㉑ソレ末代ノ悪人女人タラン輩ハミナ〳〵心ヲ（五―十九）
㉒ソレ一切ノ女人タラン身ハ（五―二十）
㉓当流ノ安心トイフハナニノヤウモナク（五―二十一）
㉔抑当流勧化ノヲモムキヲクハシクシリテ（五―二十二）
㉕夫秋サリ春サリステニ（四―十三）　…他と別筆の可能性
㉖サンヌル文明第四ノ暦（一―七）　……　〃
㉗マツ当流ノ安心ノヲモムキハ（一―三）　…　〃
㉘大坂建立（四―十五）



冒頭

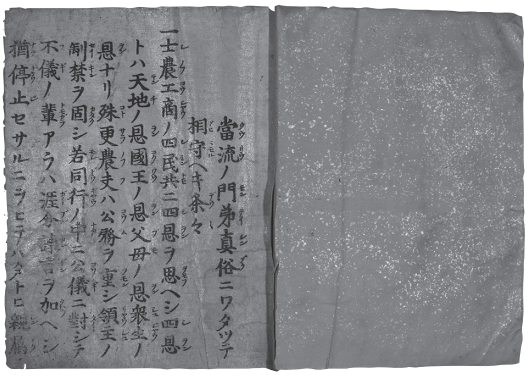


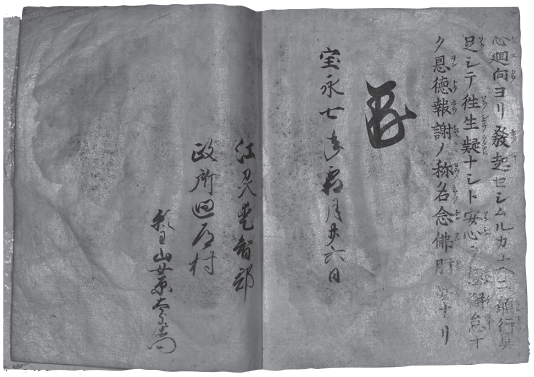
末尾

◎佛光寺門弟掟書条々　一冊（版本・袋綴装）
縦二九・三cm×横二三・九cm　墨付八六丁

外題等はなく、内容から仮に右の史料名とした。一見して本願寺系の御文に似るが、末尾の花押は江戸時代の佛光寺二十世随如（一六四一―一七二一）のものである（『真宗人名辞典』）。さらに宝永七（一七一〇）年霜月廿六日の年月日と「江州愛智郡政所廻道村　願主山女原太郎左衛門」の情報がある。冒頭に「当流ノ門弟真俗ニワタツテ相守ヘキ条々」とあり以下、左記のような書き出しの三二条にわたる条文がある（書き止めは「～ナリ」）。

①一、士農工商ノ四民共ニ四恩ヲ思ヘシ
②一、道場ニ参詣イタサハ道俗男女ニカキラス威儀ヲタ、シク
③一、在々所々ノ門輩現世名聞ヲ本トシ
④謹テ思ニ夫祖師聖人ノ教化ニヨリテ
⑤抑当流ニ於テ一向専修ノ念仏ヲ勧ル条
⑥当流ノ門弟タル輩ハ勧化ノ趣ヲヨク〳〵領解シテ
⑦夫無始ヨリ以来、生死ニメクリ六道四生ヲスミカトシテ
⑧夫一向専修ノ念仏ハ凡夫往生ノ目足ナリ
⑨夫仏道修行ト云ハ時機相応ト不相応トイヘル理ヲ
⑩夫他力真宗ノ安心ト云ハ五逆悪下根下智ヲ簡ス
⑪抑当流ニ於テ信心獲得スト沙汰スル事ハ第十八願文ノ心ナリ
⑫凡極楽往生ノ安心流儀マチ〳〵ナリトイヘトモ
⑬抑本願名号ノ利益ト云ハ、一乗頓教ノ至極ナレハ
⑭夫他力ノ往生トイフハ我身ノ善悪ヲモカヘリミス
⑮末法ノ中ニ億々ノ衆生有テ仏道修行ヲナストイヘトモ
⑯凡末世今時ノ衆生、本ヨリ煩悩具足ノ凡夫ノ身トシテハ
⑰凡ソレ男子ニテモ女人ニテモ罪フカキ愚痴ノ凡夫ハ
⑱抑念仏ノ行者常ニ心得キワムヘキ大事ノ候
⑲夫教門多シテ八万四千ニワカレ
⑳夫真宗念仏ノ行者ハ先他力本願ノ趣ヲ尋知ヘシ
㉑夫愚痴無智ノ身トシテ別解別行ノ他宗他門ニムカヒテ
㉒夫当流ノ勧化トイフハ諸仏菩薩ヲモカネ信セス
㉓抑当流門弟ノ中ニヲヒテ宿善ノ熟・不熟コレアル故ニ
㉔夫モロキヲスクヒアヤウキヲタスケタルハ
㉕夫弥陀如来超世本願ノ念仏往生ト申ハ
㉖凡宿善到来シテ幸本願ニアヒ叶ヘル正機正業ノ者ニ至テハ
㉗夫仏教多門ニシテ区ナリトイヘトモ
㉘凡念仏ヲ申浄土往生ヲ願ニツイテ自他ノ念仏トテ二ツアリ
㉙夫女人ハ五障三従トテ生得トシテ
㉚凡当流ニ勧トコロノ雑行雑修ノ心ヲ打捨テ
㉛夫出離ノ正道其行一ニアラス
㉜夫信ハ入法ノ本諸善功徳ノ母ト云ヒ又百行ノ源ト云テ


冒頭


末尾

〔研究会活動報告〕

アジア仏教研究会

武田　龍

今年度はコロナにより、研究会を開くことができなかった。二〇〇四年四月の発足以来、ほぼ毎月一回のペースで研究会を開催し、愚直に仏典を読み続け、インテリジェンスを蓄積してきた。そして、ようやく初期大乗経典特に浄土経典を文学形式の検討から調査する方法に辿り着いた。そこで、この方法を用いて、筆者は経の制作意図を考察する小論を本年度の研究所紀要にまとめ、これまでの成果を問うことにした。

親鸞は正信偈に「道俗時衆共同心」の句を挿れて、教法の同時代性に注目している。この「時衆」とは梵語 samaya（集団、集合の意）の訳語であろう。僧であろうが俗人であろうが「共に同じ時代を生きる者」という言葉である。個人の出自や能力や努力に差はあれども、時代の大きな波から逃れることはできず、個人はその中に身を置くことになる、という同時代性である。

日野家出身の親鸞は、幼児期に出家を余儀なくされ、念仏停止の宣旨により還俗させられたうえ、越後へ流罪となる。赦免後は関東へ移り晩年に帰洛するが、生涯を通して図書の閲覧ができ、新しい知見に接することができた。藤原氏の人脈は生きており、何らかの支援や庇護があったと思われる。貴族の出自に終生翻弄され、平家の没落、貴族政治の終焉を見て獲得した時代認識であろう。

親鸞が強く共感した浄土思想とは如何なるものかを考える。

アジア仏教研究会分科会

玉井　威

今年度は開始早々、コロナの影響で四月以降、約七か月にわたって休会を余儀なくされた。キャンパス内への立ち入り制限が続く中、参加者は減ったものの、残る参加者の熱意に促されて、十一月から再開の運びとなった。

テキストは従前通り『ミリンダ王の問い』で、引き続きこれを読み進めている。その中に、「真実語（誓言）」（saccakiriyā）が出てくる。これは、真実を語れば、それによって望むものが生起するというもので、パーリ仏教では古くからある。

たとえば、真実を語る者が「雨よ、降れ」と唱えれば、雨が降る。そこには自然因は存在しないが、真実そのものが降雨の根拠となるという。諸法の因縁生を説く仏教本来の考えからは逸脱するものであり、悟りを目指す出世間レベルの仏教とは相いれないものである。

ところが、パーリ聖典には、一般信者の求めに応じて、さまざまな超自然的な現象を出現させ、それを真実語でもって説明していく文言が見られる。いわば言霊思想、呪術的な祈願儀礼を容認しているわけである。後に、パーリ仏教において、パリッタ（護呪）と言われる特定の経典、偈文の誦唱が、病気治療、安全祈願、追善供養などに用いられることが容認せられていく。

真宗において、天神地祇崇拝や卜占祭祀、また追善供養などとどう関わり、どう折り合いをつけていくのか、比較検討するにふさわしい課題だと思われる。

真宗史研究会

安藤　弥

今年度は次のとおり、二回の研究会を実施した。

第一回目（通算第四二回）

【日時】十二月三日（木）一六時三〇分～一八時

【報告者】小山興誓氏（魚津社寺工務店）

【題目】「「近世の東本願寺大工棟梁
―笠井家の新出史資料を中心に―」

第二回目（通算第四三回）

【日時】二〇二一年三月十二日（金）一三時三〇分～一六時

【報告者】訓覇浩氏（本学講師）

【題目】「アイヌ民族同化政策と『東本願寺北海道開拓錦絵』
―共生の世界を願って―」

小山氏は、江戸時代の東本願寺諸殿の造営事業に関わった大工棟梁について、特に笠井家に関する資史料を丁寧に確かめて、これまで正確に理解されていなかった実態を明示した。あわせて大谷祖廟の歴史的検証に関する建築史的新知見を提供し、調査研究の進展に関する問題提起があった。

訓覇氏は、明治以降の北海道開拓における「アイヌ民族同化政策」と、それに関わって東本願寺が第二二世現如の北海道下向を〝顕彰〟した錦絵の制作をめぐる諸問題について整理した内容を提示した。今年度後期に実施した史料展示「東本願寺現如と北海道」における課題と連動している。

いずれも、コロナ状況下、学内関係者のみの参加とせざるをえなかったが、コロナがあろうとなかろうと、次年度も引き続き二回程度、もしくはそれ以上の研究会活動を予定している。

「東アジア仏教思想史」研究会

市野　智行

今年度は、新型コロナウイルス感染症により、対面による研究会の開催は、十二月十四日、一月十二日、二月十八日の三回のみとなった。感染防止ガイドラインに基づき、学生や学外者の参加はやむをえずご遠慮いただき、教員・所員のみで実施した。

テキストは今年度も昨年度に引き続き、明恵房高弁（一一七三―一二三二）の『一向専修選択集中摧邪輪』（摧邪輪）を研究対象として、輪読を進めた。

現在、読み進めている『摧邪輪』巻上の一部では、議論対象はもっぱら、法然（一一三三―一二一二）の「菩提心」論にある。たとえば法然の『選択本願念仏集』（選択集）では、善導によりつつ、菩提心等の余行を廃し、念仏のみを選び取ることを論じている。法然が菩提心を諸行と位置付け、本願の行たる称名念仏と区別していくのに対して、高弁は、弥陀の本願・念仏には、菩提心があり、それが浄土を荘厳している根拠であると考える。ここに両者の仏教観の違いが鮮明に現れている。

また興味深いのは、高弁の善導に対する理解が専ら正統なことである。両者の善導に対する注釈態度を比較すると、よりその立場の違いが明確になると思われる。

さらに、親鸞が「浄土の大菩提心」と菩提心を論じるのは、菩提心行を行じる主体の問題をあえて明確化する狙いがあると考えるならば、法然の教えを、高弁の仏教学を通して語りうることを論証しようとしているという側面も言い過ぎではないように思える。これらの視点を踏まえて今後深く究明していきたい。

「近代戦争下の学術調査と人的交流」研究会

藤井由紀子

昨年度、新たに研究会を立ち上げ、日本近代における戦争と学問との関係を具体的に考究する活動を開始した。メンバーは藤井由紀子、中川剛、花栄、日比野洋文である。活動の目的は、資料を通して、戦争と学問との関係にきちんと向き合い、その上で近代学問の客観性・実証性の質そのものを問い直すことにあるが、五年前、日中戦争期に中国で学術調査を行った小川貫弌（龍谷大学名誉教授）という中国仏教史学者の残した資料との出会いがきっかけとなっており、その後、科学研究費助成事業（「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫弌の記録より」、日本学術振興会学研究費・基盤研究C）に採択されたことを機に視野を広げ、戦争下で学術調査に携わった研究者たちの記録の発掘に努める計画を立ててきた。

ところが、本年度は、コロナウイルスの影響で、研究会や調査をほとんど行うことができなかった。個別に文献調査や資料集めを行った程度である。来年度は、活動の形態を工夫しながら、ひきつづき、研究活動を試みたいと考えている。

「日本仏教の成立と展開」研究会

（活動継続中）

教行信証学習会

吉田　暁正

講師：森村森鳳（張偉）先生
趣旨：漢文として『教行信証』を読む
会場：同朋学園Ｄｏプラザ閲蔵２Ｆ　多目的会議室
テキスト：東本願寺刊『真宗聖典』（必要に応じて資料配付有）

開催日　二〇二〇年　10／22、11／26
＊以下の日程は、感染対策により中止となった。
二〇二〇年　5／28、6／25、7／16、9／24
二〇二一年　1／28、2／25

『教行信証』の読解において、親鸞が言葉の中に込めたメッセージを確かめるように学習を進めている。特に、親鸞の言語表現、文字への厳密さに注目して読むこと、また、その表現の中に込められている重層的な意味を読み取ることを意識しながら読解を進めている。

昨年度に引き続き、今年度も、「信巻」における「王舎城の悲劇」について学習を進めた。親鸞は、ここに登場する人物を『浄土和讃』に記されている。物語の経緯と人物関係を確かめながら、課題を学んだ。また、「総序」における王舎城の記述も確認し、学習を進めている。

十分な学習の場が開けなかったが、継続して学びを続けたい。

二〇二〇年度彙報

《研究所構成メンバー》

所　長　安藤 弥

所　員　箕浦尚美（人文学科）　岩瀬真寿美（社会福祉学科）
北島信子（社会福祉学科）

所員・幹事　市野智行（仏教学科）

研究顧問　小山正文　小島惠昭　蒲池勢至　玉井 威

所員（非常勤）　千枝大志　川口 淳

客員所員　青木 馨　飯田真宏　塩谷菊美　大山誠一　大艸 啓
岡村喜史　花 栄　北畠知量　ギャナ・ラトナ
黒田龍二　嘉木揚凱朝　脊古真哉　新野和暢　武田 龍
服部 仁　藤井由紀子　藤村 潔　ブレニナ・ユリア
松金直美　吉田暁正　吉田一彦

客員研究員　老泉 量　川村伸寛　周 夏　高木祐紀　中川 剛
日比野洋文　松山 大

《所員会議》

5／26、6／16、7／21、9／15、10／27、11／10、12／10、
1／12、2／16

《公開講座等》

・教行信証学習会（活動内容は前掲）
・現地で学ぶセミナー…　前期・後期とも今年度は中止

《ギャラリー史料展示》（会場＝ＤＯプラザ閲蔵一階ギャラリーＤＯ）

・前期（7／10～7／30）〔担当〕安藤 弥・千枝大志・川口 淳
「同朋和敬―学園の理念と歴史〈3〉―」展（同朋大学70周年記念）
※オンライン展示解説（7／11～公開中）
・後期（12／11～12／21）〔担当〕安藤 弥
「東本願寺現如と北海道―「本願寺道路」着工150年―」展
※オンライン展示解説（12／21～1／31）
→今年度はコロナ状況下、前期・後期とも、学内関係者のみの観覧制限となったため、オンライン展示解説を併せて実施した。

《史料調査活動》

・真宗寺院史料調査
12／23　慈雲寺（真宗大谷派・愛知県岡崎市）他
12／24　大谷祖廟（真宗大谷派・京都府京都市）
3／4　名古屋別院（真宗大谷派・名古屋市）＊継続調査
・寄託史料の整理調査（勝鬘寺・養念寺）
・学園史関係資料の再確認
→今年度はコロナ状況下、例年のような調査出張が実施できなかったため、紀要における調査記録の掲載を断念せざるを得なかった。ただし、その代わりに特別調査記録を掲載した。

《特別活動》

・その他（随時、研究所への学術的来訪・打診へ対応）
・蒲池勢至研究顧問による、マイクロフィルムスキャナー（SL1000）購入費のご寄付とマイクロフィルムスキャナーの購入。
・研究所所蔵フィルム史料のデジタル化作業
・アーカイブ関連実習
・くずし字解読学習会の実施（学芸員課程履修学生希望者対象）